

---

# 学校～朝～

ありすきゃろる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学校〜朝〜

### 【コード】

N0259J

### 【作者名】

ありすきゃるる

### 【あらすじ】

朝の学校。不思議な体験をしたような、しないような……

彼は、玄関で立っていた。

場所は学校。朝特有の清々しい空気で満ちている。朝。それは様々なものが起きて様々なことが始まる時間。そして、同時に終わる時間。昼のように活発ではなく、夕方のように哀しくもなく、夜のようには怖くもない。

そんな中彼は、一人で玄関に立っている。前を見ながら、立っている。誰かを待っているのだろうか。普通ならそうだろう。普通なら。

彼は、ただ前も見ている。学校を見ている。

後ろを気にする様子はない。誰かを待っている様子ではない。ただ、立ち続けている。

彼は、玄関で立っている。

彼が、いつから立っているのか。

彼が、何故立っているのか。

彼が、中に入れるのか。

それは、誰も知らない。

彼は、玄関で立ち続けている。

「誰が1番早く学校に来られるか、競争しよう」  
この言葉が始まりだった。

それは、放課後。彼らが帰らずに、教室で会話しているなかで出た提案。子どもというのは、1番になりたがる性質でもあるのだろうか。1番に憧れる。かけっこで1番になりたがる。勉強で1番になる。給食を誰よりも速く食べきる。そんなどうでもいいことを競いたがる。

当然誰も、反対はしない。ただ学校に早く来るだけである。たったそれだけ。こんなに簡単なことはない。簡単だからこそ、誰もが1番になれる可能性がある。

私も、そう思った。私は、足が速いわけでもなく、頭がいいわけでもなく、食べるのが速いわけでもなかった。いつも1番になれなくて、悔しかった。だから、この提案が出たとき、私は喜んだ。私の家は、学校から近いところにあつた。徒歩で10分くらいだった。周りの友達の家より近かった。これなら、勝てる。1番になれる。私はそう考えた。

次の日、私は早く起きた。そして、いつもより早く家を出た。学校は7:30に玄関が開く。私は7:00には学校に着くように家を出た。外の空気は、朝の匂いがした。少し朝靄が出ていて、遠くは見えない。まるで雲のなかにいるみたいだった。車は通らない。自転車も通らない。人も通らない。鳥も見当たらない。周りには家と田んぼだけ。まるで、世界を独り占めした気分では、学校に向かった。30分も早く着けば1番だろうと、笑いながら。玄関が開くまで何してよいか考えながら。

でも、そのことを考えるのは無意味だった。

私は、7:00に学校に着いた。着いたとき私は驚いた。玄関の前に、同い年の子どもが立っていたのだ。驚いたあと、私は悔しくなった。1番になれなかったのだ。しかし、私は不思議なことに気づいた。玄関が開いているのである。7:30に開くはずなのに、30分も前に開いている。そして、開いているのにあの子は、入らない。私は少し怖くなった。玄関が開いているのも怖かったし、あの子が動かないのも怖かったし、あの子と自分以外がここにはいないのも怖かった。

とりあえず、玄関に行ってみることにした。私が玄関に近づいても、その子は動かなかった。私は、玄関の前に着いた。彼は、私の知らない子だった。見たことがない子だった。私は、玄関に入らず校舎内を見た。校舎のなかはとても静かだった。下駄箱が静かに並んでいるだけで、人の気配はしなかった。それが、怖かった。校舎が自分を待っている気がした。下駄箱が自分待っている気がした。校舎が自分を待ち構えているように思えた。下駄箱が自分を潰そうとしているように思えた。

そして、なにより怖かったのが近くににいる彼だった。彼は、私に興味を全く示さなかった。ただ、玄関を見ていた。いや、彼は何も見えないように見えた。ただ、そこに立っていた。それだけだ。それだけで、終わっていた。生きているとは思えなかった。

私は、その場にいるのが怖くて逃げ出した。遊具がある庭に逃げた。当然そこにも誰もいなかった。いつもは誰かが遊んでいる場所に、誰もいない。それがまた、私を怖がらせた。ここは、いつもの学校だろうか。私がいつも通っている場所なのか。わからない恐怖を、私に感じさせた。

「ねえ」

声が聞こえた。後ろから。振り向いた。そこには、女の子が立っていた。玄関にいた子じゃなくて安心した。しかし、すぐに怖くなった。いつ、彼女は来たのだろうか。全く気づかなかった。

「何してるの？」

笑わずに聞いてくる。静かに聞いてくる。私は、怖くて答えられなかった。

「あまり早く来たら駄目だよ。」

「始まる前に来たら駄目だよ。」

「まだ終わってないから。」

笑いながらそう言って、彼女は玄関のほうに歩いていった。私はよくわからなくて、ただ聞いていた。私は怖くて、ただ立っていた。

しばらくして玄関のほうに行ってみると、そこには誰もいなかった。ただ、玄関が開いていた。それは口を開けているようにも見えた。

しばらくして友達がやってきた。1番になれなくて悔しいと言っていた。私は1番になれたらしい。うれしくなかった。玄関のなかに入った。校舎に食べられた気がした。

私は、それから玄関が開くより前に行くことをやめた。

私は、1番を目指すのをやめた。

今日も、どこかで誰かが言う。

「誰が1番か競争しよう」

(後書き)

あ、はい。

学校シリーズみたいな最後です。

よくわかりません。

というか、私の実体験をもとにしてるから怖くないです。

朝早く学校行くのは大変危険ということですよ。

皆様も気をつけましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0259j/>

---

学校～朝～

2010年10月15日00時00分発行